まちが舞台になる
それぞれの使い方が生まれる建築

田熊初妃
建築デザインコース

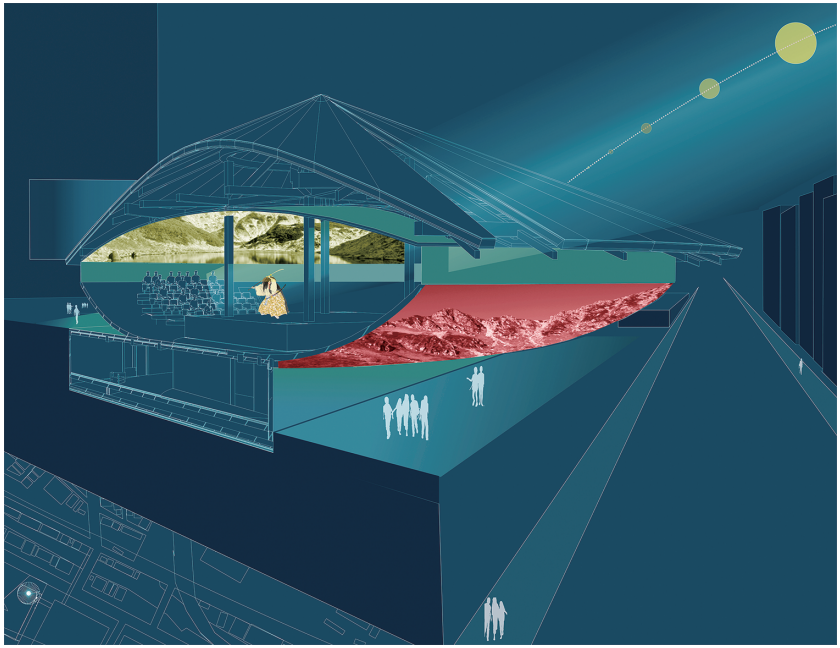
踊りと人々の幸福の関係は密接だと思う。人は今もダンスを愛するが、街中に踊ることができる場所はない。踊りは祭りなど祝事に欠くことができず日々のストレスを忘れ熱中できて、明日を生きるエネルギーをくれるが、祭りは見るだけになって素人の踊りは迷惑事になり、自らの存在を確認する世界を失ってしまったようで悲しい。そこで、みんなが自由に使える空間を作ることで、普段の歩道が、あるときはダンスを楽しむ自分を発見できる場所に変わるような日常と非日常の2つの顔をもつ場所を作ることができないか、その場所での喜びや楽しさを周りの人を巻き込んで共有できないかと考えた。駅前広場は、バスや車の機械的な回転運動のための場所となっている街中の空洞である。ここに、私が日常的に通る場所と、いつもと違う過ごし方ができる場所を求めるのは不思議なことではないと思う。それぞれの目的を持っている人で楽しさを共有できる空間を目指した。

意匠設計／S=1:50模型

この世とあの世を繋げる能の建築

藤澤ともみ
建築デザインコース

世阿弥は過去を現在に甦らせる企てを夢幻能として舞台に仕掛けた。時の遡行は万人の夢なのかもしれない。能は戦や飢饉が多かった室町時代に成立した。今、人はあの世を遠い世界として認識し夢を忘れ、能は外交手段となり日常から離れた。私はこの世にあの世を開く現代の能舞台により世界を築きたい。都市や人が流動し多様な活動が渦巻く大都市こそ敷地に相応しい。古の薪能は野外で行われ、日没とともに観客が暗闇に呑まれあの世が現前し、能が始まる。現代の能は、亀裂から差し込む西日光線が客席で消えた時に始まるのが相応しい。私は、演目の謡を精査しあの世を表す6要件を抽出し、プロジェクションマッピングを加えることで、演者と観客、この世とあの世の境目が開く、閉じた建築を設計する。映像を天井や壁に投影し、建築内外が舞台となり、人々はあの世を垣間見る。これにより、新しい能を体験し、生きることはより瑞々しい経験となるだろう。

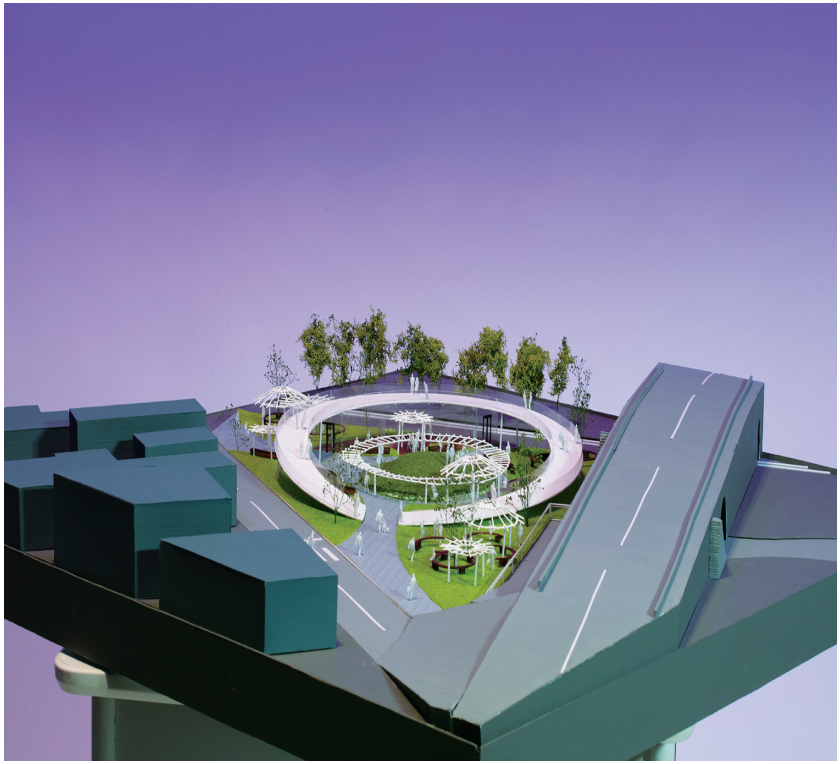


建築意匠／図面、模型

Cypher Architecture
偶発的な領域から成る繋がりの拠点

山田真鈴
建築デザインコース

私はかねてから音楽や舞踏が総合芸術としてある現代建築を追求したいと考えてきた。この源泉を現代の都市現象に求めることは不自然ではないだろう。音楽や文化の様々なモードが発展する時代において、最も即興性が高いジャンルとしてHIPHOPがある。言語の音楽性を信頼するHIPHOPは、参加者が自発的に街の一角に輪を作る演舞であり、アラビア語の0を起源とするサイファーは、偶発的なパフォーマンス参加者の焦点を作り、人垣の側を通り過ぎる傍観者の関心を誘う機械である。魅力は、自由参加を認める開放性に加え、「語り」の始まりと同時に発生し終わりと同時に消滅する空間現象の即興性でもあり、事件の勃発を目撃できる初源的劇場性にもある。無性格な街角は、語り、語られる場所となり、価値を共有できる「生きた風景」に突如として変貌する。この空間の即興性と移ろいを設計に取り込み、繋がりの輪を広げられる駅前広場とする。



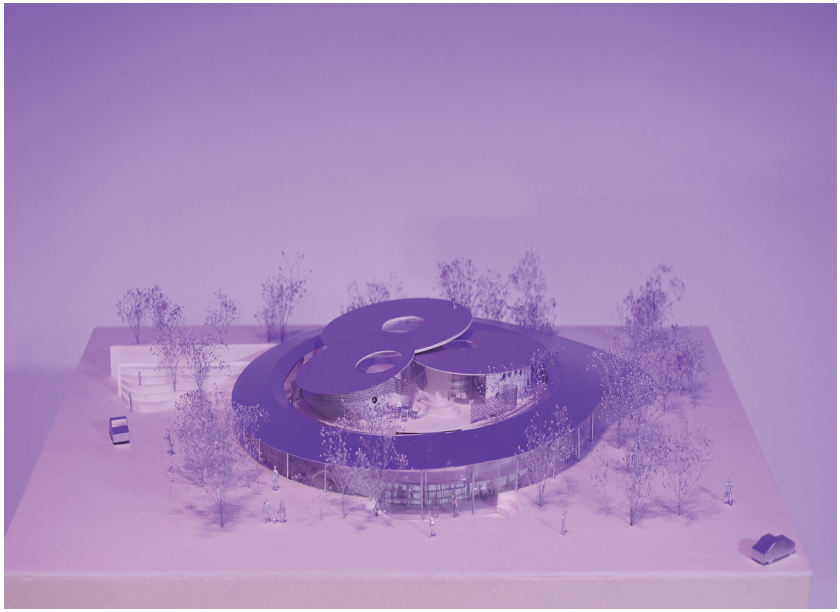
意匠設計／スタイロフォーム、スチレンボード、プラ板／h600×w910×d910mm

新しい「風景」：3世代の家と市民の家

近世のまとまりを現代の住宅に組み込む

石川天
人文社会芸術総合研究科

「風景」のある町を懐かしく思い、そして私の町にその風景がなくなった経緯とそのように思う体験を訝しく思う。この風景への関心から、まちや自然の存在を感じられる特別な内部を持つ調和した住宅を実現する。近世の住居を訪れる度、そこには現代よりも開かれた風景がある様に思った。その近世の住宅や城下町や武家屋敷における自然とまちと住宅の包含関係を研究し、現代の住宅に風景を齎すことができるのではないか。近世の武家屋敷は、侍や家族その召使などが暮らす場所であり社会との繋がりがあった。屋敷と庭の関係は、街を囲む山川に寺といった周辺の仕組みを読み解く仕掛けではないかと思い、このまちと住宅の関係を現代建築に取り入れ、将来の3世代家族の住宅を設計できると仮定した。公共性のある用途を住宅に組み込み、社会へ開いた交流の場になるようにした。この住宅は風景としてのまとまりを持ち、新しい生活の場となるだろう。

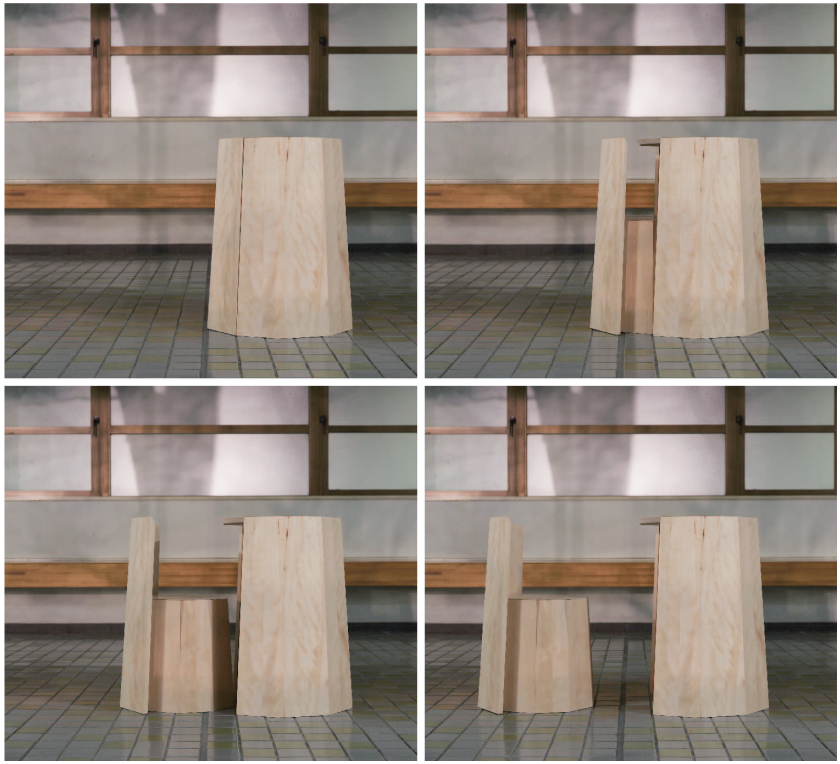


建築意匠／模型

ゆるやかな境界

中屋裕香
デザインコース

「モノ」の機能が「モノ」と「モノ」との境界を作っている。
境界は機能に従って生まれる「用途」とも言える。そのような用途の境界を、自分の意思で引き分けることのできる家具を目指した。
ある時はセンターテーブルとして集う場に、ある時はデスク＆チェアとして個人の場に。
自分で引くゆるやかな境界が、心地良い豊かな暮らしを繋いでいる。



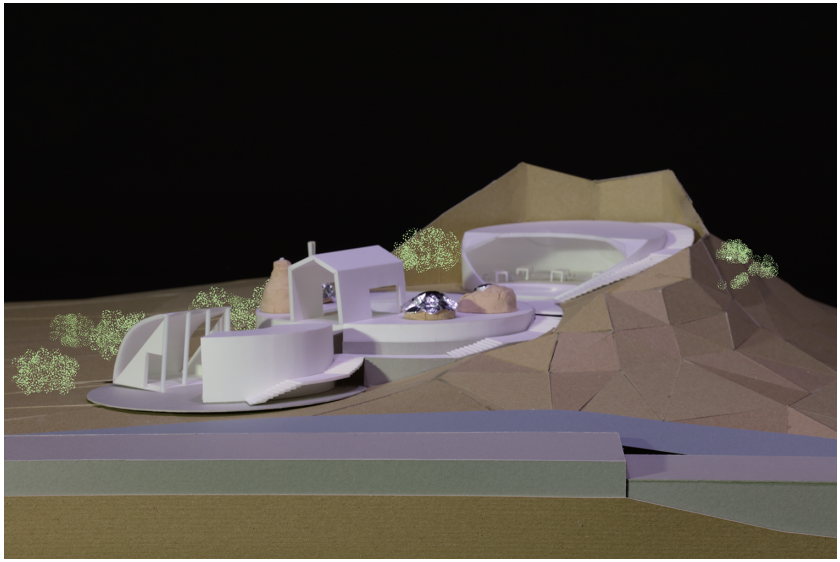
家具／樺／h700×w560×d560mm

美濃焼地域におけるまちと地場産業の共栄

松原希実
建築デザインコース

瀬戸多治見では窯元のあるまちの風景が消えつつある。そこで郊外住宅地のように画一的なまちに若い陶芸作家が活動できる開いた工房を作り、地域交流の拠点とする。焼き物文化がとけ込んだまちができる。

窯業が盛んな瀬戸多治見一帯では、山頂を削り陶土採掘を行うが、これが意外な都市開発に繋がることを発見した。採掘を終えた山頂部は格好の都市開発の舞台となり、宅地や商業施設、或いは研究施設等の敷地に転用され、水害が多い中京圏から安全な住処を求めて移住する人々の場所となっている。しかし、そこに窯業の面影はない。
民家の屋根と煙突が並ぶ風景と陶芸文化を住民の生活に近づける「小さな焼き物拠点」を再開発プログラムに組み込み、古いまちと新しいまちに散在させ、持続可能な地域文化の未来を創造する。



建築意匠／縮尺模型

祝福する建築
幸せな記憶の場所

水野菜々子
建築デザインコース

宇奈月温泉の美しい峡谷に、ふたりの幸せな記憶の原点となる結婚式場を設計する。かつて桃源だったこの場所で、時を超えてふたりを「祝福する建築」をつくる。

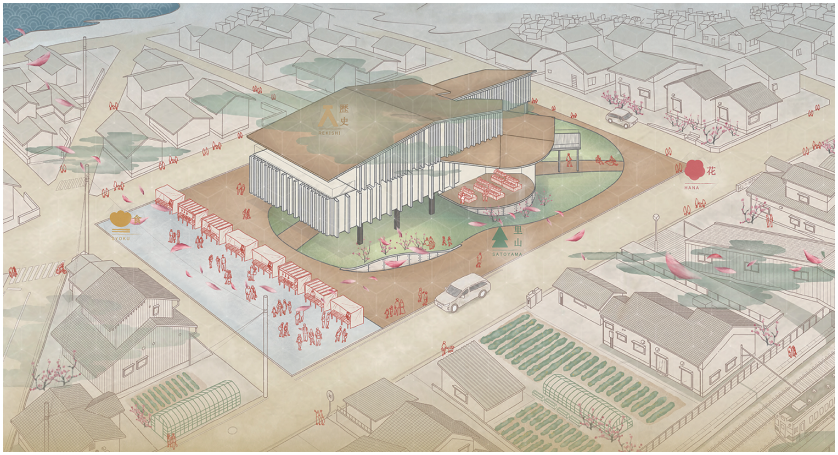
コンセプトは桃源郷である。温泉街にはモモやサクラなどの花木を植栽し、美しい自然に囲まれた桃源を蘇らせる。ゲストはふたりの人生になぞらえた桃・花・水の3つの園を通して、異なる空間体験をしながら異世界に導かれていく。写真は峡谷に突き出た式場である。3つめの園は、峡谷や建物を映す水盤であり、式場は幻想的なシャングリラとなる。
ここで結ばれたふたりが、もしも結婚後に危機に直面したとき、この桃源郷に立ち戻ることで幸せな記憶を思い起こし、危機を乗り越えられるだろう。

建築意匠／CAD、模型／h700×w830×d830mm

災害時に役立つ地域性を絡めた建築の設計

宮下素樹
建築デザインコース

近年、日本では激甚化した豪雨により施設や設備では防げない洪水が頻発しており、「防ぎきれない大洪水は必ず起きる」という考えを持たなければならない。そんな中、異常気象による災害が生じた際、地域共同体の中に助けを求められる場をあらかじめ準備しておく必要があると考えた。しかし、既存の防災施設には地域共同体を日常から醸成できるような機能は備わっていない。そこで本研究では、日常時と災害時という社会のフェーズ(時間や状態)を取り払うフェーズフリーという概念をもとに、日常から足を運びたくなるような防災施設を提案する。



建築意匠／図面・模型／h1900×w1450×d600mm

GENESIS

フィリピンの階層化社会における建築の役割を考える

Aban Kharl Anthon Komiya
建築デザインコース

GENESISプロジェクトは、ビジネスと宗教の力で貧しいものと富める者の境界線を取り除き、未来の大都市の核を作る建築プロジェクトである。
フィリピンの首都マニラのマカティ市は、経済発展を目的とした急速な都市化がすすんでいる。敷地周辺には豊かな住宅街区や中心街がある。隣には、貧困街が無計画に成長した。ここで私は、建築デザインにより、社会階層の問題を扱うことができるだろうか、と問いかけた。ビジネスと宗教を基盤として貧しものと富める者の境界線に未来の大都市の姿を形作る、核のような建築プロジェクトを完成したいと考えた。
これを「無から楽園を作り出す」旧約聖書の天地創造になぞらえることで、中心街側の日陰のある広がりから、高速道路上の教会、工房と劇場を経て貧困街側の公園（エデン）に至る帯状の計画を完成した。

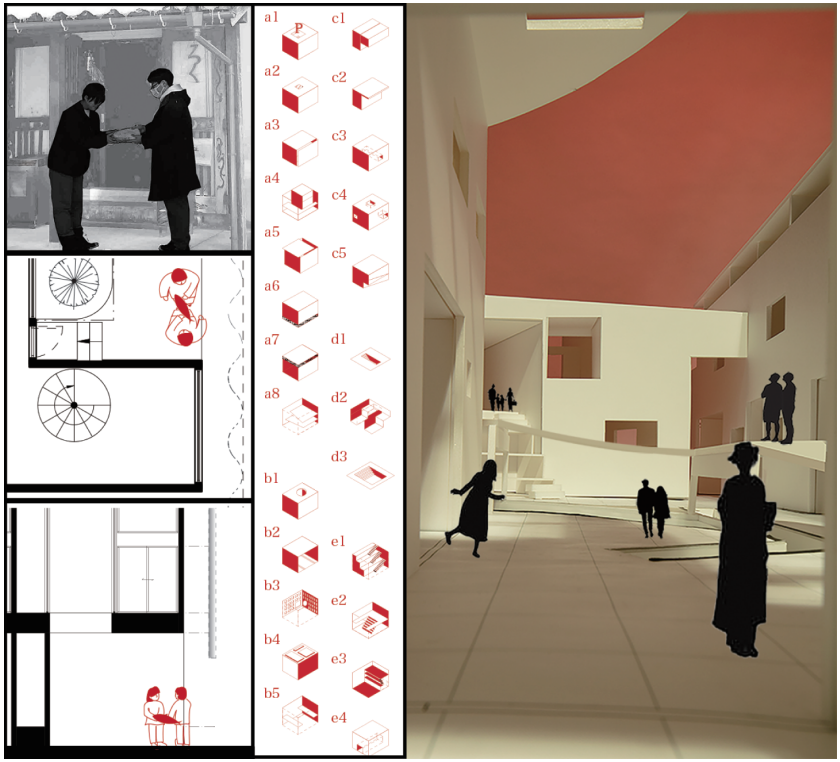
建築意匠／建築模型、図面

「親切」に集まり生きる

漁師兼業家族のコーポラティブコモンズを利他的有孔体としてつくる

浜谷詠斗
芸術文化学研究科

私は親切な行為が溢れる社会を実現するために尽力したい。私にとって建築は個人の不動産資産ではなく、親切な心が育まれるような安らぎや楽しみの場である。親切な建築がこの思いを体現する。閉じた建築に多様な孔を用いて半外部を作り出し、装体を纏って適切な距離を保つことで親切な建築が可能になる。論文研究では、オランダの著名な建築家Koen Van Velsenの建築に孔を開ける設計手法を研究した。富山県滑川市の近世に宿場町として栄え、街の中心であった場所を敷地とし、漁師たちとその家族がコモンズを結成し、住居に加え、漁業とイベントサイトを兼業することを計画した。制作では26の孔を用いて躯体を構成し、これに身体と衣服の関係の在り方を基に装体を構成する。6家族の漁師コモンズは平日は富山湾で漁に繰り出し、休日は開かれた親切な建築で都市的な出会いイベントを主催する。プログラムによって公私領域のモードを変化させる可変な建築として、親切な建築が機能する。



建築意匠／建築設計図面、建築模型

生を祝う葬祭場

触覚的想像力を用いた“生”の誘発

石川　天
建築デザインコース

ヤン・シュバンクマイエルの触覚的想像力には生と死の枠組みがあり、その美と気味悪さに感銘した。鳥取砂丘で育た幼少期の砂の暖かさと、祖母の死で感じた体の冷たさ。
葬祭場は死者に別を告げる悲しい場である。しかし、死者を介して人が生を祝福できる場になりうるはずだ。
本葬祭場は、鳥取砂丘の歴史的な痕跡の場に建つ。常に流動しパラパラと消えていく砂丘は、死と生の溢れる風景だとは考えた。死を弔いにここを訪れる人々は、雄大な砂丘と日本海の間に広がる、本来あるはずのない場所や砂の暖かさに喚起され、自分は恵まれた稀有な存在だと発見し生の喜びに包まれるだろう。絶望が希望に変わる場所をコミュニティに提供できれば、死者は生者の中心に居る場となるだろう。個が独立している現代社会において、新たな希望を感じられるような新しい人と人の“あや”を見出す場所がつくれるのではないかと期待している。

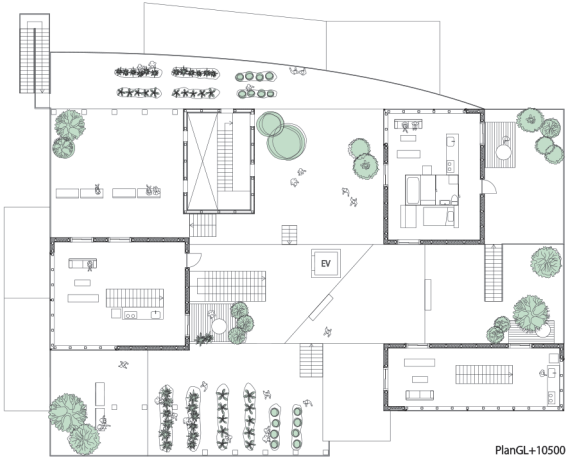
意匠設計／イメージコラージュ

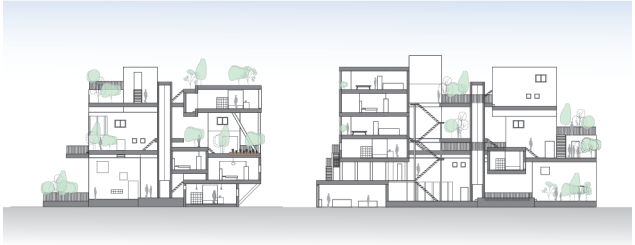
多様な世帯構成のための集合住宅

鳥のように浮遊し、交流する

斎藤靖葉
建築デザインコース

単身世帯が増加する現代の日本では、社会的孤立のリスクが高まっている。多様な世帯構成の居住者が浮遊するように交流し、自然と他者との会話が生まれるような場所が欲しい。住戸を、内部と外部の環境を自由に変化させることができる建築と考え、集合住宅を形成する。
大都市のタワーマンションも、巨大で立派な下駄箱住宅に過ぎない。家は人と人のふれあいの場である。
地方都市にあふれる、畑と様々な家がつくる広がりを立体的に組み立て、田舎を都市に持ち込む。様々な大きさの住戸を入れることで、多様な世帯構成の住人がそこに集まる。それらの住戸と、畑や遊具がある共有部を綾をなすように配置することで、そこを住人が鳥が浮遊するように歩き、その中で、住人同士のコミュニティが形成されていくだろう。この集合住宅をきっかけに、内に閉じがちな現代人の生活を開放し、社会的孤立のリスクを払拭することを目指す。



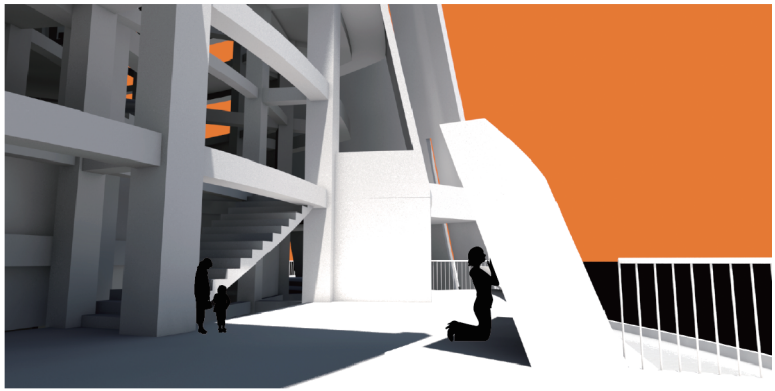


建築意匠／図面

現代人のための祈りの場

佐々木美玲
建築デザインコース

現代社会では人々が生き急いでおり、自己と向き合えるような場所・空間があまりない。具体的な用途を満たすためにできている場所、あるいはその場所で具体的な目的を達成することが存在意義であるような場所ばかりである。本来建築とは、人々がそこで「未来を想う」場所なのではないだろうか。そこで建築自体が持つ神聖な印象を与えるはたらきを用いることで、「人の純粋な居場所」を「祈りの空間」と称して提案しようと考えた。計画敷地である富山駅前は、多くの人が通行し路面電車の往来も盛んである。駅前という立地を生かし、駅利用客の来訪と、同時に建物に訪れる人による駅前広場の活性化を促す。利用者は年齢・信仰を問わず、それぞれの経験に基づいた様々な解釈の空間体験ができるような設計を目指した。宗教建築が持つ静けさ・非日常性を再現するため、境界性を持たせながらも人を遠ざけないような工夫を考え設計した。



意匠設計／図面、模型、3Dデータ

塀と穴

内外の境界が曖昧な暮らしの場

別所壱将
建築デザインコース

私にとって、都市はすこし息苦しい。意味に満たされていて、隙間がないのである。だから私は神社にたまに行く。鳥居をくぐると、そこには違う世界が広がっていて、息苦しさから解放されたように感じるのである。神社は都市にあいた「穴」だといえるだろう。周りの塀や木々、社殿、そして中にいる私自身の身体も含めて、みんなで穴をつくっていると私は感じた。
そんなぽっかりとあいた穴のような場所を金屋町に設計する。金屋町の住人達が色々と協力して都市の息苦しさから自分自身を解放することを目的とした、自由な活動ができる場所である。いろんな穴を自由に行き来できる暮らしの場をつくる。
ここに建つのは図書館、カフェ、カプセルホテル、サウナ、展望台、自動車整備場、バス停の7つの領域を穴としてつくる建築である。そこでは、人の活気が人垣をかこうように、人垣がかこう穴が都市の隙間となるだろう。

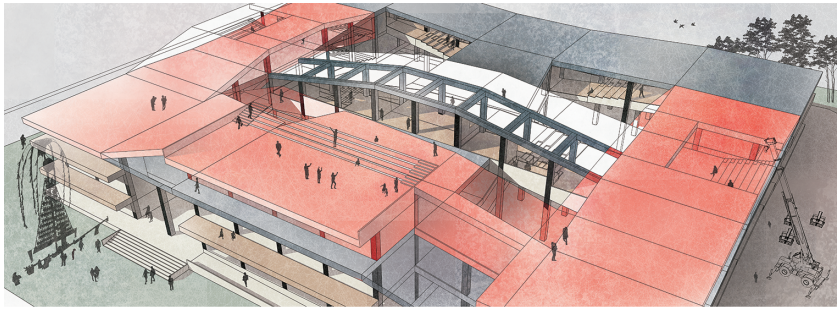
建築意匠／模型

地域と共に育む学舎

新築・改築・減築により段階的に変化する小中一貫校の提案

森野涼帆
建築デザインコース

現在、富山県魚津市は変化する教育需要の最中にある。小学校の統廃合計画が進み、12校存在していた小学校は4校に統合される。この魚津市を題材に、2023年から2053年までの30年間で段階的に変化する小中一貫校の設計を行う。新築・改築・減築の手法を用いることで拡張性を高め、人口動態の変化により変貌する教育需要に対応し、変化を続ける建築を提案する。
30年間のプロセスを設定し、必要・不要となる機能を段階的に挿入・削除していく。学校としての機能だけではなく、コミュニティセンターなど地域住民のための機能も追加していくことで、学校と地域が共に育む学舎となる。また、地域と学校を帯のように編み込んでいくプロセスこそが、新しいメタボリズムのあり方である。グラデーションのように移り変わる空間がプログラムの新陳代謝を可能にし、変化を繰り返す建築となる。



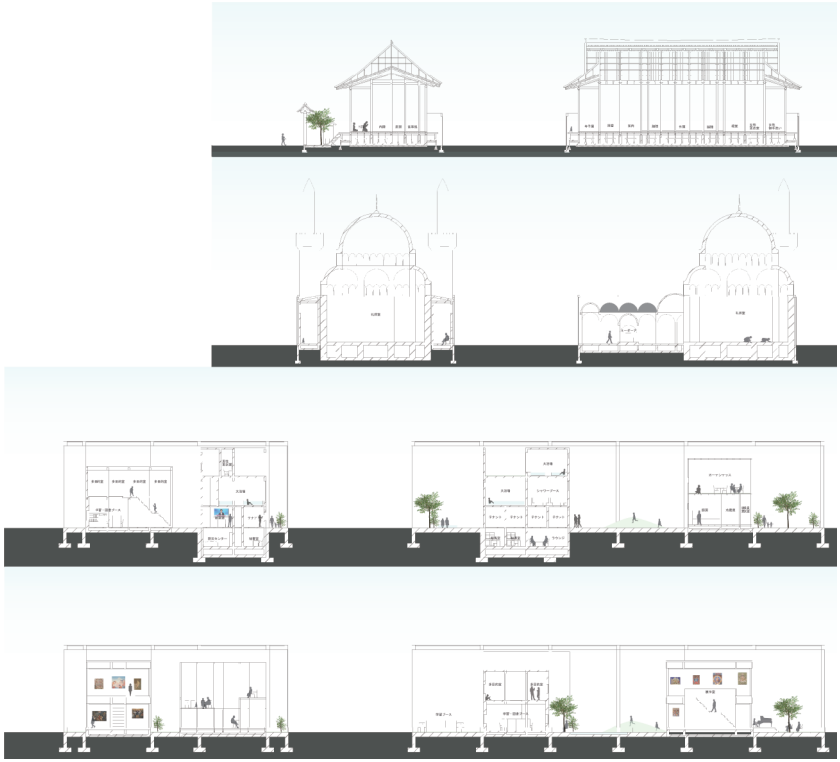
建築意匠／図面・ドローイング・模型

光から成る荘厳性のコモンズ

多宗教への相互理解を可能にする祈りの場

山田領花
建築デザインコース

現在、世界で最も信徒数の多い宗教はキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教である。宗教の多様性は人類の豊かさを形成するが、反対に人々の間に亀裂を生じさせ紛争に発展した歴史もある。今後の世界平和を考えたとき、信仰するか否かに関わらず、多様な宗教の豊かさを知り、深い相互理解を確立できる日常的な場は重要である。そこで、それぞれの宗教に特別な意味を持つ光に焦点を当て、異なる宗教の文化を感じることができる日常的な祈りの場を提案する。半透明なスクリーンの上に屋根のみ見える様々な建築をつくる。それらの建築の中ではその宗教を体験でき、内側から宗教と光の関係を知ることで理解を深めることができる。外部からは、内部の様々な光を予期できる。半分街に開いた建築を一つのランドスケープに修景し、それぞれの宗教の独自性を判別できると同時に、調和する街並みができるような、特別な雰囲気を実現する。



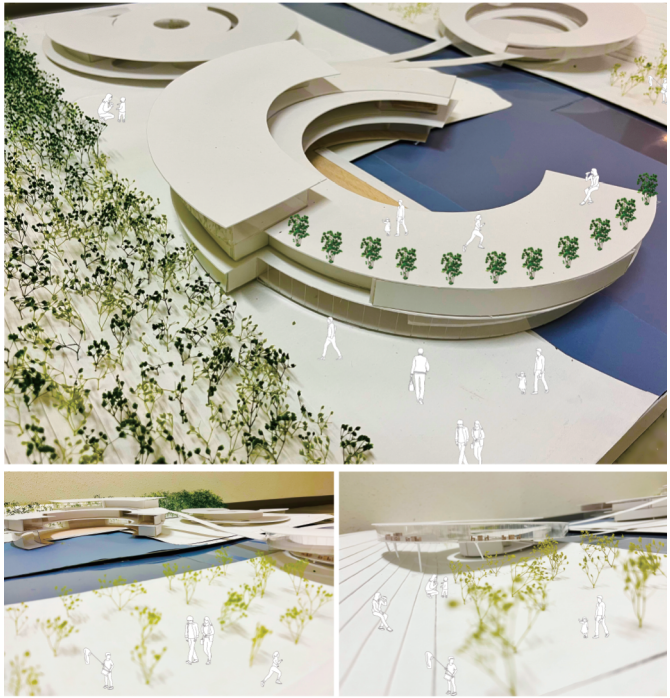
建築意匠／図面

親水風景で創出する新たな入浴施設

遊水地を中間領域とするからまりしろ建築

和田真侑
建築デザインコース

昨今、地球温暖化が頻繁に指摘され急激な降水量の増加が身近な問題になっている。そこで、想定外の自然災害で学んだことをもとに、身の回りの住環境を考え直す計画を試みる。神通川流域に遊水地を計画することで、長期的な視点で「地域の在り方」「自然との関係」を考え直す。実際に行われている「エコ氾濫」をもとに、計画地に川の水を流すことで、生態系を豊かにし、地球エコロジーに触れる場を身近に作り出す。既に敷地にあるスケボー広場やスポーツ広場に、新たに湿地帯、生態系の丘、遊泳ゾーンを追加させることで、地域の人たちが楽しめるランドスケープを提案する。また、温泉施設と学習館、カフェを媒介として、地域住民が集まれる「居場所」を創出し、多世代にわたって、水・川・平野について考える場所を提案する。



建築意匠／模型

富山駅前未来風景を紡ぐ

リサーチバイデザイン『渋谷型にぎわいモデル』

浜谷詠斗
建築デザインコース

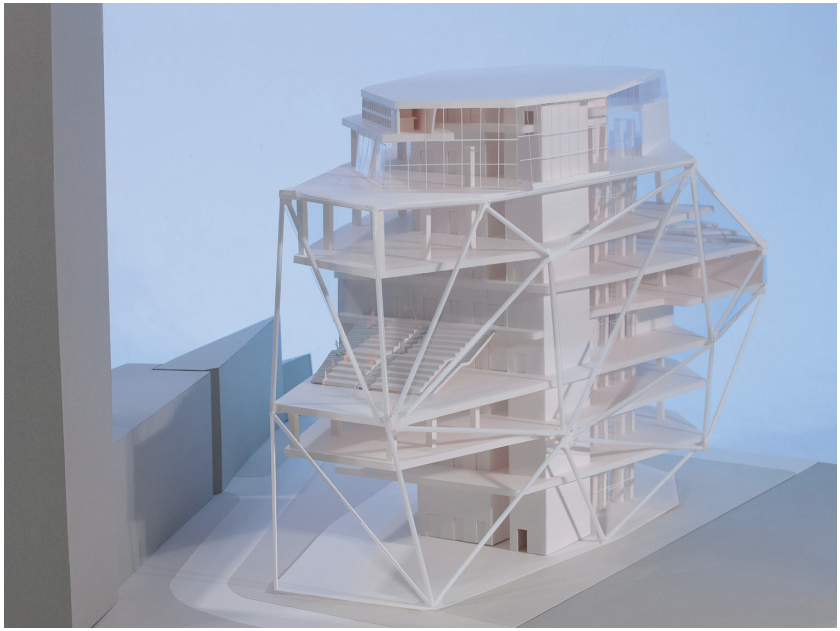
戦前より富山駅前は市民の賑わいの中心であったが、戦後のモータリゼーションや核家族化を伴った都市化の影響で郊外が脚光を浴び駅前は通過することの方が多くなった。しかし誘導区域としての可能性はある。今は埋め立てられた神通川の濁流のダイナミズムを想像力を持って解釈し、見えづらくなった『富山らしさ』を復活する。昨今の富山県の目覚ましいスポーツにおける業績をこのダイナミズムに重ね、スポーツ技術や知識を伝導する『スポーツの図書館』という未だない出会いの場を計画する。鉄道線の合流地点である富山駅前にこの施設を組み込むことで、県内スポーツのネットワーク拠点となり、トレーニングやスクールで街を訪れるリピーターを育てる。この戦略が最も顕著な渋谷駅を鍵とし分析し、得られた『渋谷型にぎわいモデル』を動線やプログラムに反映する。リピーターと多くの市民によりこの街と建築が多様な出会いの場となるだろう。

建築意匠／建築図面・建築模型

生命の『動的平衡』に基づく建築のパラダイムシフトを目指して

増川夕真
建築デザインコース

生命とは常に「壊してつくる」『動的平衡』の活性状態である。生命は、全体の秩序をかろうじて保ち、持続的な発展を達成してきた。私は、文化の持続的な繁栄には建築がこの『動的平衡』状態に倣った建築空間を具現化することが鍵になると考える。私はこの建築空間の構築にあたり、『動的平衡』をヒトと空間の「相対的な関係における絶え間ない分解と再構築の流れ」と翻訳しインキュベーション施設を設計した。本計画は『全ての人に開いた場』をビギナー、投資家、インフルエンサー、一般市民、管理組織からなる「5種のアクターによる創発的行為体系」で「そこで逐次行われる行為が形式を変える」場をプログラムする。この建築空間は、決定論ではなく浸透論に基づいた計画で、社会状況の変化にも柔軟に対応できる。日本を拓く人を育てる新しい機関、それは明治時代の開港から培った「進取の気性」遺伝子を持つ神戸にこそ先陣を切って実現できるシフトである。



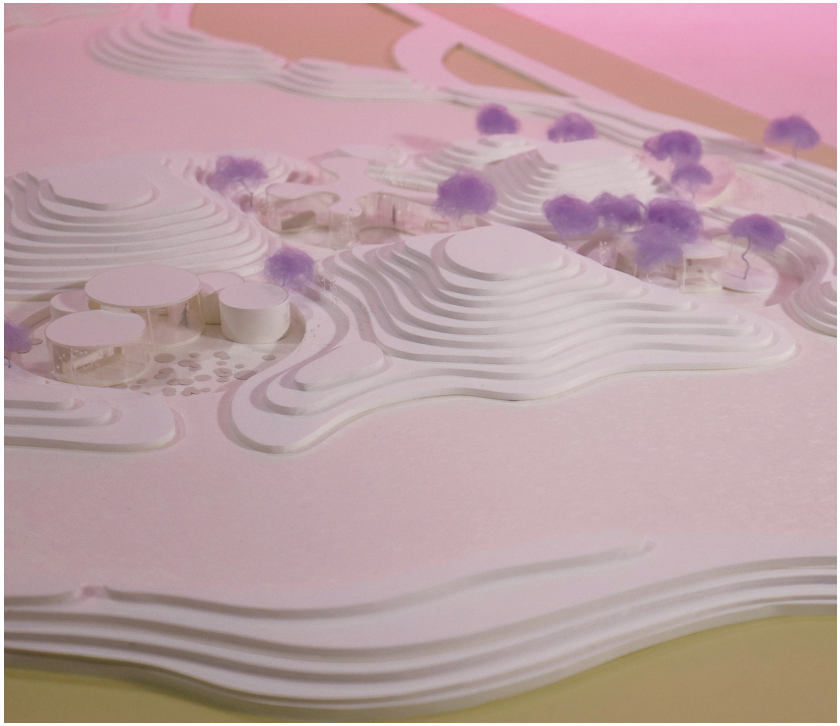
建築意匠／図面、建築模型

未来を歌詠む場「円山」

大伴家持の布勢の水海を表象する

三宅日向子
建築デザインコース

「布勢の水海」は万葉の歌人である大伴家持が好んで歌を詠んだ場所である。かつて「布勢の水海」は氷見の南部平野に広がっていた。私は、布勢の円山を含む自然風景が時を超えて詩情に溢れる豊かな場所として蘇ることを切に願い、現代の歌詠みの場を設計した。建築意匠には風景を再発見し、家持の見た布勢の歴史的価値にかたちを与え、共通資産として育み、未来をつくる価値とする力がある。そこで、現代の歌詠みを広義の意味で捉えたアーティストインレジデンスを提案し、文人墨客のレジデンスタイプを研究した。家持は近景、中景、遠景を巧みに用いて水海の実景に、奈良の都を想う心を重ねた。土を盛り、その上に水域を乗せ、さらにやどの場所をつくることで家持が見たであろう近景をつくり出し、時を越えた風景の創出を試みた。私にとっての建築芸術とは、地域と世界、偉人と庸人が邂逅し、現在と過去、未来をつなぐ場をつくり出すことである。



建築意匠／縮尺模型

公共空間と地域再生

松本市城下町水辺のリノベーション

伊藤源
建築デザインコース

近年、地域／地方再生の手法・アプローチとして公共空間利活用の動きが活発になってきている。しかし、一般的に行政管理の空間は民間利用までのハードルが高く、中でも水辺（河川・港湾）に関する法律や規制は複雑であり、水辺の開放は活発ではない。
本設計では、長野県松本市の城下町を流れる女鳥羽川河川敷を対象敷地とし、城下町の文脈を継承した空間を提案することにより、水辺に関する種々の規制緩和、地域再生を目指した。
護岸・堤防を変形させ河川方向に開放し、上部には柱と屋根だけの空間をかけ、空間内の業態を仮設店舗とすることで、店舗形態の柔軟性、水害時の迅速な撤退を可能とし、若手の工芸作家やアーティストなど様々な人に開かれた、まちの活性につながる水辺を設計した。

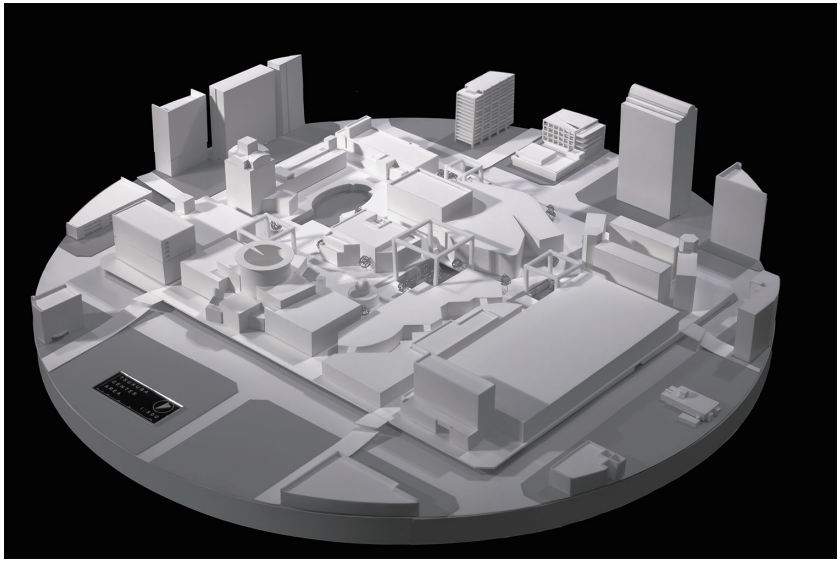
都市建築デザイン／模型／h410×w1682×d595mm

つくばセンター地区の未来

磯崎新の「多目的という無目的」を鍵概念として

荒井敢太
建築デザインコース

私は、故郷つくば市を憂う。つくば市は戦後最大の計画都市として生まれた。つくばセンタービルを作り上げた建築家：磯崎新が、つくば市計画の「多目的」という「無目的」という限界を指摘したことを、私は市と磯崎の2019年の往復書簡に見出した。この思想、法律や理論、オランダの都市計画手法を駆使し未来のつくば都市ビジョンを描いた。磯崎は「王の不在」「7つの性格の欠落」を指摘し、つくばの都市構造に対しての批判を続けた。私は、建設から40年という時の流れを踏まえて、空洞化という現在の都市問題を、当時からの都市構造の問題を結びつけて再構築する必要があると考えた。つくば市は官が土地を管理する稀な都市である。巨大な力が蠢く都市を代謝的に成長可能な街として描くことで未来を考えるとき、私は磯崎新を継承することこそに可能性をみた。磯崎の建築で型取った7つの性格により、継続性のある都市ビジョンをメッセージする。



都市計画／図面・建築模型／h250×w1020×d1020mm

未完が促すまちの新陳代謝

魚津中央通り商店街の防火建築帯の増減築に着目して

伊藤野々香
建築デザインコース

富山県魚津市の「魚津中央通り商店街」は上階への増築が可能な造りになっている防火建築帯である。後方や上部に増改築、アーケード撤去などがされ、時代の流れによって商店街の景観が変化し続けている。このような増殖・展開する建築思想を持つ「メタボリズム」を軸に、副論文では各時代の空間とその利用の変容を分析して増減築のメカニズムを明らかにした。それを基に、未完という手法を用いて、新陳代謝を促す建築と仕組みを提案した。

コンセプトは「“建物”と“知”が『新陳代謝』する商店街」。商店街での会話や振る舞いを通して知識が蓄積されることで、新たな学びの機会、すなわち商店街が年齢を問わない「まちの学校」となる。また、未完＝“余白”があると捉え、新たに動線をつくることと、木フレームとシェードの導入により新陳代謝の促進を図った。社会等の変化に対応しながら地域性と持続性がある柔軟な建築提案を試みた。

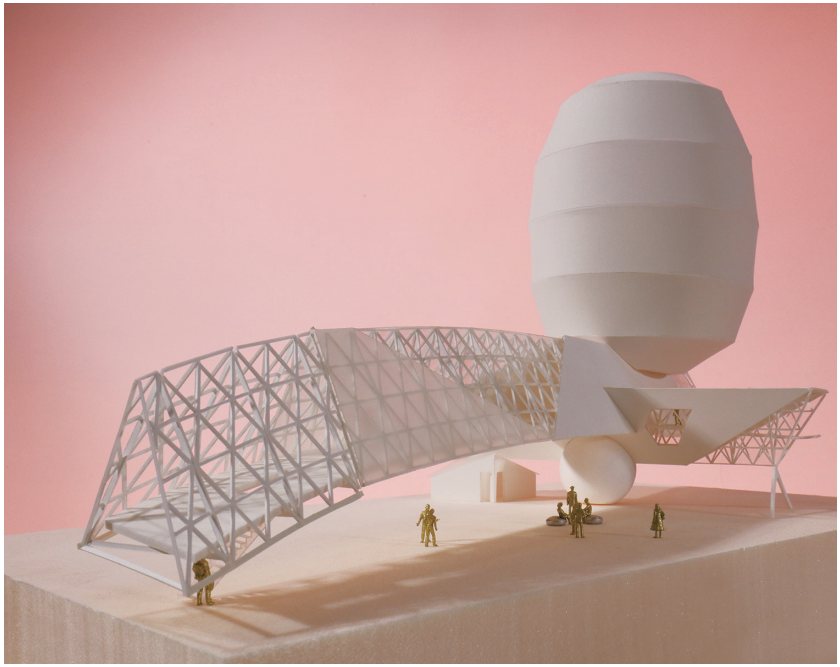
都市・建築デザイン–地域再生計画／縮尺模型

家と食堂

桔木を用いて現代的な「あや」を架構する

中島晃一
芸術文化学研究科

桔木構法は、禅院方丈はじめとする日本建築の大きな軒を支えており、日本の武家や僧侶の日常生活の場所をより開放的な場所として実現した構法である。
本計画では、その伝統的な桔木構法を現代的な建築空間を架構する方法へと展開するため、シュルレアリスムの「デペイズマン（dépaysement）」という既存現実の概念からの脱却を行う手法を用いることを試みた。
ここで施主として想定したのは、食堂を共同経営するなど、住宅と住み手の関係を考え直すことで、新しい都市居住を目指す若い4家族である。
この家では、キッチンと家族の食卓を食堂に変換し、調理の役割を担っていた家族がその役割から自由になり、この家で暮らす家族の一人ひとりが適度な社会性の中で自由な個人としての暮らしとふるまいを獲得する。



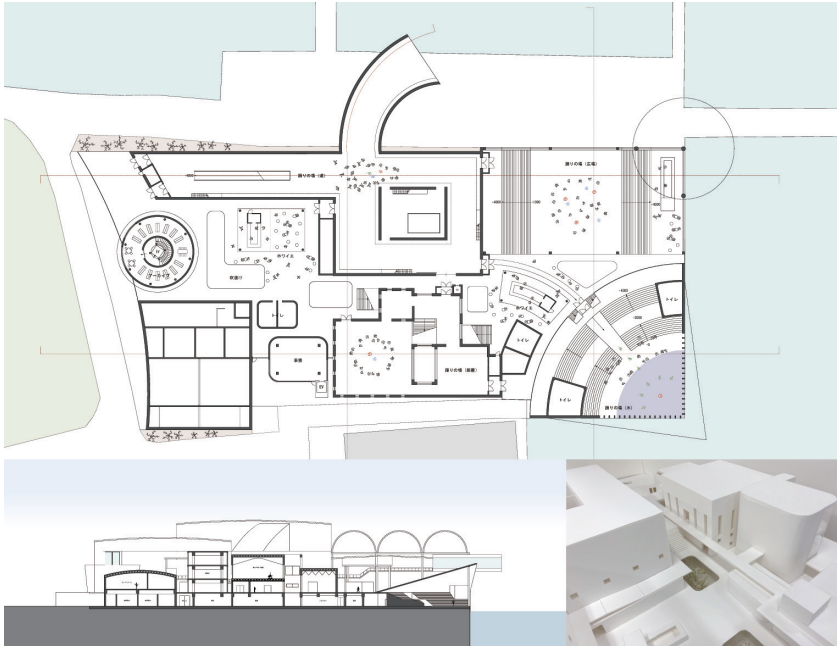
建築意匠／図面、模型

現代の踊りの為の劇場建築

「みるみせる」の空間関係と街の要素を用いて

田中真琴
建築デザインコース

現代の踊りは、自由な表現を追求し、多様な変化を見せているが、表現の場所である舞台は、古典の踊りからのプロセニアム形式の劇場を使用し続けている。近年ダンサーは、街を舞台にしたり、カメラのダイナミックな視点を使って新しい表現に取り組んでいる。現代の踊りにおける観客とダンサーとの関係は、それぞれの領域が入り混じり、様々な視点からの鑑賞により、初めてその価値を満喫することができると考える。
本計画は、「踊りを立体的かつ、流れるように鑑賞できる新劇場」を求め、「みるみせる」の空間関係を建築的に再構成する事で、現代の踊りにふさわしい新たな劇場建築を設計した。



建築意匠／建築模型・図面

旧鋳造所の「孵卵器」

中林真紀
建築デザインコース

高岡鋳物発祥の地である金屋町は時代の変化に応じて幾つもの鋳造所を閉鎖した。本プロジェクトはこの旧鋳造所を建築家、芸術家の卵や芸文生が自立するまでの作業場としてリノベーションする案である。
既存の構造を基本としてガラスなどの現代の素材で新旧融合した構造の２４時間のシェアアトリエと共に学生のシェアハウスシェアキッチン、コーヒースタンドを設置し、新しい町のシンボルになるような場所にする。このことで制作の様子をオープンに見せ、それが町への繋がりとなっていく。

建築意匠／建築模型、図面

街中の終後三景

酒井香奈
建築デザインコース

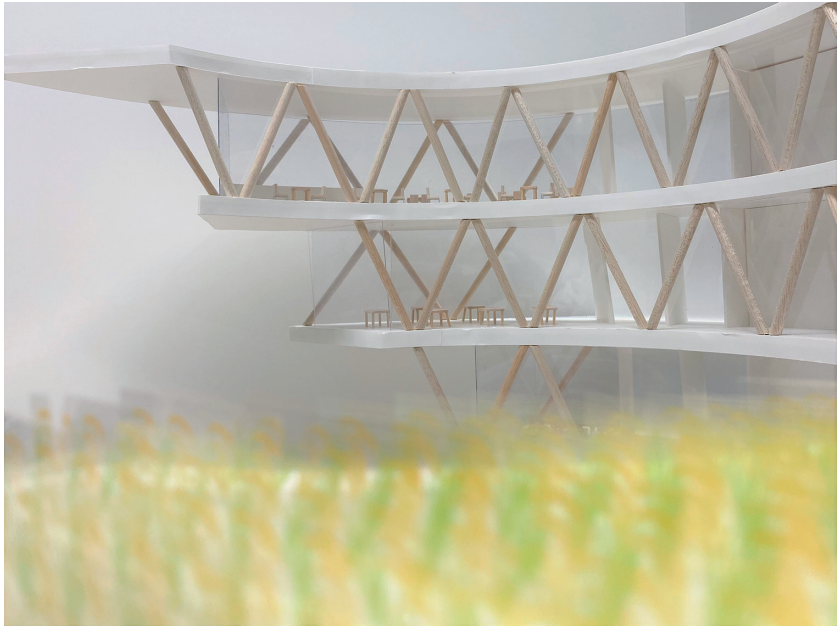
死の気配は街から姿を消した。近年墓地の建設にあたって、近隣施設や近隣住民から多くの反対意見や反対運動が行われている。そのため、墓地は市民の生活から隔絶されていった。今後、日常生活の中の一部を進んで墓地の中で過ごすような、そんな生活が営まれていくことはできないだろうか。そこで生きている人間にとって新しい価値を持った墓地を提案する。圧倒的かつ威圧的な建築空間の力を利用して、弔いが目的である「死」の存在と墓地とは全くの無縁である「生」の両方を同じ場に内包する“空間葬”を用いる。空間葬の場である「覚」、「想」、「受」の三つの空間によって人々と街と死の気配が上手く共存していく。

建築意匠／縮尺模型

米製品エコロジーの園

番場美槻
建築デザインコース

富山市は稲作が盛んな地域であるが、近年の都市化の影響で美しい田圃の広がりを感じる機会が減少した。未来の富山の姿を稲作を文化に高める建築で表現したい。稲が育ち、米・酒・菓子などの製品になるまでの工程を共同体験でき、嗜む場所を街中につくる。
1つの円ではなく、2つのから成り、大きな円には外から職人が作業をしている様子が見られるように、小さい円には施設内の人が田圃を眺められるように機能を配置した。
また、2つの円の中心を少しずらす事で、田圃の広がりに変化をつけ、田圃に包まっるような体験ができるようにした。



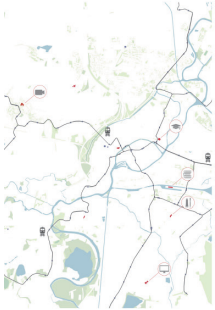
建築意匠／縮尺模型／h600×w2000×d1300mm

環流酒造

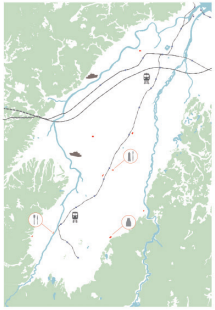
SDGs手法開拓への挑戦

福井美瑳
芸術文化学研究科

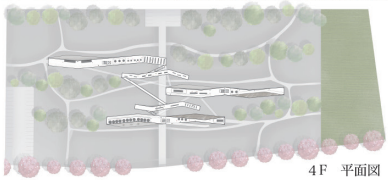
本計画では、建築主導で地方都市を活性化し持続性を高める方法を研究した。フランスのストラスブールの都市計画：PLUに学び、砺波平野の耕作放棄地を横断的な管理で再活用する。瀬戸内の離島のネットワークにアートを展示することで、地域を活性化した瀬戸内国際芸術祭を研究し、文化としての「日本酒づくり」を軸とした、新たな「酒蔵」を砺波平野の一角に提案する。この酒蔵は、砺波平野を基盤とし、農・林・畜産業の循環エネルギーの核となる。奔流のエネルギーを体現した透明な建築は、酒文化を発展させた小矢部川に沿うよう建ち、水・酒造り・来場者の流れを取り込み田園風景や酒文化を映し出す。



ストラスブール 図書館ネットワーク



砺波平野 酒蔵ネットワーク



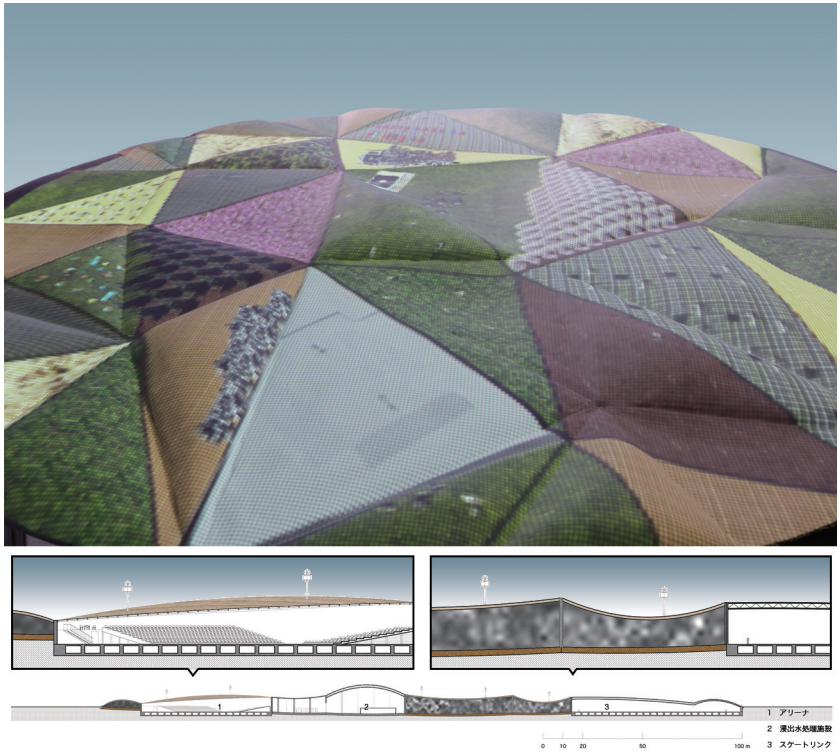
4F　平面図

建築意匠／模型・図面

双曲面公園
SDGs手法開拓への挑戦

森田哲平
芸術文化学研究科

本計画は、SDGs技術のリーダーとなる都市公園構想である。実現可能な場所として郊外の大型商業施設近傍、中心街の公共施設建て替え予定地などを挙げる。多様な余暇の場を、同時多発的に可能にする新しい幾何学パターンを追求した。現代のハイプレイン多面体から着想した三角形のパターンを用いて、各部分に異なる舗装や植生を配置し、様々なひと・アクティビティ・ものが出会う場をプログラムする。一般ゴミの焼却灰等を造成のための資材として利用して変化に富んだ人工の地形をつくりだし、各所にスポーツ施設などの公共施設を組み込む。これは現代の過剰なゴミを福祉の実現に転換する方策であり、そうすることで、より持続的な方法で豊かな市民生活を実現する。



建築意匠／模型・図面